

### 3月14日「高い山に登る」マタイ福音書17：1～13

ある時、イエス様は弟子たちの中でも特にリーダーシップを持っていた3人の弟子、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを連れて高い山に登られました。イエス様は静かに祈る時を大切にされましたので、付いていった弟子たちもいつものことだと思ったことでしょう。ところが、山頂に着くとイエスの姿が神々しく変わったのです。「顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった」とあります。さらに、旧約聖書の代表的な2人の人物、モーセとエリヤが現れて、イエスと話し始めたのです。モーセは旧約聖書の最も大切な律法を書いた人物、そして、エリヤは同じく大切な預言書を代表する人物。加えて、エリヤは終末の時には前もって現れる、と信じられていた人物でした。つまり、それは終末の出来事、神秘的な神の国の訪れの出来事だったのです。そしてそれは居合わせた弟子たちにとっては全く予想していなかった出来事でした。ペトロはこんなことを口走り始めます。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」しかし、ペトロが言い終わらないうちに、さらに驚くべきことが起こりました。彼らは天から神さまの声を聴いたのです。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」弟子たちはあまりの出来事に非常に恐れて、イエス様が起こしてくださるまで、ただただひれ伏すしか出来ませんでした。

今日の物語はある意味、異常な出来事です。マタイ福音書はこの出来事を9節で「幻（「今見たこと」と訳されている言葉は幻と解しうるらしい）」と呼んでいます。弟子たちは突然、神の国の幻を示されたということです。弟子たちには結局イエス様の十字架の死と復活が起こるまで、いったい何が起こっていたのか理解することが出来ませんでした。今日の物語は人間には理解しがたい仕方で、神の国は唐突に訪れるということを私たちに教えてくれます。

少し前に、中国からの実習生チェン君を見送りました。コロナ禍もあって、予定よりも早く、ずいぶん急な別れだったので、本当に寂しい気

持ちでの別れとなりました。彼の寮の近くの教会員さんのお家でお別れすることにしたのですが、工場での仕事は厳しく、彼は酷く腰を痛めていたようなので、彼にとって日本での経験は辛いものだったのではないか・・・そんな心配もありました。けれども、別れにやってきてくれた彼は、本当に私たちとの別れを惜しんでくれました。見送る私たちにも涙が溢れました。最後に、4人で祈りを合わせました。チェン君の行く先の無事を祈り、いつか再会できることを神さまに願いました。チェン君は日本語がそれほど得意ではないので、お互いにスマホの翻訳機がなければ会話も出来ません。それでも、国や言葉を超えて、信仰が私たちを繋ぎ合わせた瞬間であったように思います。私たちには時々ですが、さまざまな壁を越えて、本当に心と心が通じ合い、隣人を心底愛することが出来る、互い大切に思い合うことが出来る時があります。私はそんな出来事を「神の国」と呼ぶのではないかと考えています。時間にしたらたった10～15分ほどでしたが、神さまはコロナ禍という非常に困難で難しい暗闇に於いて、突如神の国を私たちに示してくださったのです。イエスがファリサイ派の人々に「神の国はいつ来るのか」と尋ねられた時に応えられたことです。「**神の国は、見える形では来ない。**

**『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」**

今日の物語を、突然神の国を示された弟子たちの物語と見ると少し面白いことに気がきます。私たちはそれが示されてすぐは一体何のことだか分からないのです。弟子たちもイエスが復活されてから、ようやくあの出来事はイエスが神の子であることので確かなしるしだったのだと、気がきます。ペトロはこんなことを言います。「**主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。**」何を言っているんでしょう！？神の国がちっぽけな掘立小屋に収まるはずがありません！それなのに、ペトロは何とか自分の手に収めようと試みるのです。人間の愚かさかを示しているかもしれません。しか

し、単に愚かとも言い切れない面もあるのです。

東日本大震災から10年が経ちました。『信徒の友 3月号』で特集が組まれ、津波の被害を受けた新生釜石教会の柳谷雄介牧師の文章が紹介されていました。私の大学の先輩で、一度岩手のこの教会を訪ねたこともあります。柳谷牧師は被災地は本当に悲惨な状況ではあったけれど、確かにイエスはそこにおられた、と書いておられます。すこしだけ紹介します。

「震災直後には、教会の大勢の人が集まってきました。最初は私が一人で教会の駐車場に座っていたのです。そこに幼いお子さん連れのお母さんが立ち寄り『みんな殺気立っていて疲れちゃいますね』と言ってしばし休んでいかれました。この一言で、教会のすべきことは、休息の場を提供することだと思いました。聖書にも7日に一度は奴隷も家畜も休ませろと書いてあります。教会にテントを張り、『憩いのテント』としました。

日本国内のみならず、全世界から支援物資、ボランティアが集まりました。教会は支援物資配布、心のケアの拠点となりました。地元の人、遠くから来たボランティア、被災した人、していない人、教会員、非キリスト者、ありとあらゆる人が出入りして、常に笑顔があふれる場所になりました。私はこの姿こそ、教会のあるべき姿だと思っています。困難を抱えている人々に教会が門戸を開いて寄り添うこと。宗教の違いを教会が受け入れて、来訪者の弱みにつけこまないこと。教会の建物は破壊されたけれど、本質的な神の教会、神の国が現れたと思っています。」

『信徒の友 3月号』15～16頁

東日本大震災、未曾有の大災害の真っ暗闇の中で、教会が津波によって破壊されてしまった中で、しかし、柳谷牧師はその中に本当の神の国を見出したと言うのです。柳谷牧師は何とかこの神の国を地上に繋ぎとめようとされましたが、そのままの状態を維持することは叶わなかったそうです。結局、「憩いのテント」の働きは半年、ボランティアの働きは1年で終わることとなりました。ボランティアが減少し、柳谷牧師も働き詰めで、疲労がたまり、うつ症状も発症されていたのです。こう書いておられます。「被災地に現れた神の国は一瞬一瞬に驚きがあり、ハプニングの連続で、疲れ

るものでした。」ペトロは仮小屋を建てて、神の国を何とか繋ぎとめようとしますが、それは失敗に終わります。神の国を見せられるとそれはあまりに素晴らしく、私たちは永久に繋ぎ止めたくくなります。けれども、そこには人間の限界もあり、なかなか叶わないのが現実なのかもしれません。

では、ペトロの願いは愚かな叫びだったのでしょうか？何とか、神の国が留まって欲しい、仮小屋だったら建てられるかもしれない・・・それは馬鹿での外れな願いだったのでしょうか？いいえ、神さまはこの幻を本当に実現するように、私たちを招かれるのです。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」高い山に留まるのではなく、イエスの教えに従って、もう一度歩みだすようにと、私たちを招かれるのです。弟子たちがふと気づくと、イエス様は輝く衣ではなく普段着に戻っておられました。そして弟子たちを連れて山を下っていかれます。そして再び、神の国を告げ知らせ、病の人を癒し、隣人を愛する旅に出かけられるのです。私たちはこの方に「聞け！」と神さまから命じられているのです。しばらくの間、震災のことを懐かしむような風が見られた柳谷牧師は、今は、また、もう一度あの時見た神の国を実現しようと目指して釜石での宣教の業に励んでおられます。柳谷牧師が書いておられることです。「あの日を境に教会が開かれ、街も開かれる芽がそこかしこに見えています。悲しい現実が消えてなくなったわけではありませんが、それにもかかわらず圧倒的な力で働かれる神への信頼が増し加えられつつあります。」

私たちには時々、本当に時々ですが、神の国と出会うことがあります。愛に溢れ、神がこの世界を良しとして作られたその神秘に出会うことが出来ることがあります。残念ながら、人間の力でそれを無理やり繋ぎ止めることは叶いません。その先にはまた、いつもの日常が待っています！でも！それはイエスが共にいてくださる日常です！イエスが先頭にたって導いてくださる日常です。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け！」イエスに聴きながら過ごす日常にはまた必ず神の国が垣間見える瞬間があるはずです。そこに出くわすことを願いつつ、私たちはまた宣教の業へと出ていくのです。